地域で暮らすこととは
～地域資源の活用と連携の実践～

【キィワード：　地域生活・実践　】

所属　社会福祉法人覆育会　賀茂障害者就業・生活支援センターわ　　氏名　高橋　和彦

１、賀茂地区の現状

賀茂地区は、伊豆半島の南半分に位置し、1 市５町で人口 62,000 人の少子高齢化が進んでいる地区です。地域の社会資源も少なく、グループホームは、2 法人が 5 か所で運営していて、定員は 39 人です。昨年の賀茂地区のグループホームの支給人数は 58 人で、約三分の一が圏域外を利用しています。

今住んでいる地域で暮らし続けたいときに、さまざまな地域の社会資源を利用しながら生活しています。しかし、この地区では本人が思うような生活ができる状態がなく、圏域外の社会資源に頼って出ていく人もあります。

地域生活拠点も昨年から設置されましたが、コロナ禍の中で、今年度後半になってやっと少しずつ動き始めました、これからの展開に期待したいものです。

２、地域資源の活用について

私たちのセンターには、就労したいとのことで、相談に来られます。その人なりの就労を考えながら、地域生活を支えていく責任は、各市町にあると考えていますので、市町の障害福祉担当と話をしながら、利用できる社会資源を探していきます。

地域福祉を担当している市町の社会福祉協議会や作業所や居宅介護事業所など、福祉サービスの関係者とも相談します。

もう一つは、本人がもっている地域での関係や特徴なども使いながら、支援を組み立てます。たとえば、隣近所の関係や、行きつけのお店など、その中には、地区担当の民生委員や町内会の人、大家さんなど以前から本人と関わっている人たちにも役割を担ってもらうこともあります。その意味では、私たちが本人の持っている地域の関係者と知り合いになること、なども必要だと考えています。

一つの法人で、その人の生活を丸抱えにして地域生活を支援できる圏域ではないので、様々なところと連携します。

３、福祉とつながらなかった方の支援

相談に来る人の中に、今まで障害福祉とつながらず、家族や職場などの中で生活していたが、親の死亡や親族だけでは扶養できなくなったり、職場を解雇され行くところがなくなり、生活の糧をえるために就労したいとのことで出会うことになります。しかし就職相談だけでなく、生活全体を組み立てなおす必要がある方がおります。

２０歳代～６０歳位の高齢者になる前に、支援や扶養してくれる人がいなくなり、かといって一般就労では採用にならず、就業・生活支援センターに来るケースです。

このような場合、本人の意向を聞いたうえで、障害手帳の取得から始まり、障害年金や福祉サービスの利用手続きの支援をしながら、生活を構築していくことになります。

４、いくつかの取り組みについて

今までに関わってきた、いくつかのケースです。

① 解雇と倒産などにあいながら就労を続

けるケース
② 作業所に通いながら地域での生活を続けるケース
③ 一般就労と作業所を併用しているケース
④ 住み込みで一般就労しているケース

５、課題

地域で関わる人支援していく人を育てていくしくみをつくること。

地域生活が継続していけるようにしていくこと。